

第31回

第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

仏教の受容と発展

今回学ぶこと

仏教というものが、どのようにして日本に受容され、日本独自の発展をし、人々の間に定着していったかを考える。まず、はじめて仏教を日本に本格的に導入したとされる聖徳太子が作ったといわれる十七条憲法（憲法十七条）について学ぶ。次に、平安時代の最澄・空海らの仏教の特色について学ぶ。最後に、法然・親鸞・道元・日蓮らによってはじめられた日本独自の仏教である鎌倉仏教について学ぶ。それを通して、仏教というものが日本人の思想形成にどのような影響を与えてきたかを考える。



講師

田中久文

■ 仏教の受容と聖徳太子 ■

日本で最初に本格的な仏教思想を説いたのは聖徳太子しょうとくたいしだといわれる。彼が書いたとされている十七条憲法（憲法十七条）は、儒教とともに仏教をベースとしたものであった。

その基本的精神は「和」の尊重にあるが、それは単なる他者への同調を意味するものではない。他者との意見の対立を前提にしながら、だからこそ共に間違いの多い平凡な人間であることを自覚し、寛容の心をもちながらも、互いに徹底的に議論してコンセンサスを求めていくべきだということが説かれている。

■ 平安仏教「最澄・空海」 ■

奈良時代に栄えた仏教は、朝廷の権力と結びついた学問中心のものであって人々の信仰に根ざしたものではなかった。平安時代になると、そうした古い仏教に飽きたらなくなった最澄さいしょうと空海くうかいは、中国から新しい仏教をもたらした。最澄の伝えた天台宗てんだいしゅうは、『法華経けきょう』という経典に基づいて、すべての人間はみな仏になる可能性をもっているという平等主義を説くものであった。彼の開いた比叡山延暦寺は、その後の日本における仏教研究の中心地となっていった。また空海の伝えた真言宗しんごんしゅうは、密教とよばれるものであった。密教は宇宙の中心だいにちによらいに大日如来という仏をおき、この世界はすべて大日如来が仮に現われたものであると説いた。したがって、私たちも大日如来と一体になれば、「即身成佛そくしんじょう」（この身のままで直ちに仏になれるということ）が可能になるとした。密教は自然との一体化を尊重する日本人の伝統的な考え方もよくマッチしているため、その後の

日本文化に大きな影響を与えた。

■ ■ 日本仏教の誕生「鎌倉仏教」 ■ ■

平安時代の末から鎌倉時代の初めは、貴族の支配が崩壊し武士階級が台頭してきた、日本の歴史における最大の変革期であった。こうした時代の転換は、人々の心に不安感をもたらし、これから世の中は悪くなる一方だという「末法思想」が次第に広まっていった。

しかし、そうした「末法思想」による危機感は、人間そのものを深くとらえ直そうとするきっかけとなり、ほうねん法然・しんらん親鸞・どうげん道元・にちれん日蓮といった人たちによる鎌倉仏教が生まれることになる。

法然・親鸞は「南無阿弥陀仏」ととなえるだけで、死後西方の「極楽浄土」に往生して、そこにいる阿弥陀仏に救ってもらえることができると説いた。特に親鸞は「悪人正機」（悪人こそが阿弥陀仏の救いの対象であるという考え方）を説いた。また道元はひたすら坐禅の修行をするだけで悟りが開けるとした。その場合、修行（「修」）と悟り（「証」）は別のものではないという「修証一等」という考え方を示した。さらに日蓮は、「南無妙法蓮華経」ととなえることによって、この現実を平和で豊かな世界に創り変えようと言った。こうした鎌倉仏教は、日本独自のものであり、やがて多くの民衆に支持されることになる。

◆ コラム ◆

十七条憲法では、議論の重要性がとても強調されています。大事なことほど独断で決めないで、みんなで徹底的に話し合えというのです。そのとき、完璧な人間は誰もいないのだから、自分の意見にばかり固執しないで、謙虚に相手の考えに耳を傾けろとっています。今日、民主主義の風化がいわれたりしていますが、日本にも古代からこうした著作があったということにはとても勇気づけられるのではないのでしょうか。